

あそびはらっぱものがたり

あき

すとうあさえ

カシヤ、カシヤ枯れ葉を踏む音、どんぐりでふくらんだポケット、公園のすみで見つけた小さな小さなきのこ。秋は秋の楽しみが、子どもたちを待っていてくれます。では、あそびはらっぱものがたりのはじまり、はじまり。

どんぐりころころ

秋といえはどんぐり。スタッフの一人千春さんが、いろいろな形のどんぐりを帽子付きで拾ってきてくれた。さっそく、子どもたちに「くぬぎ」を見せると、「ぞうさんどんぐり」「ハリちゃん」などと声

がとぶ。「マテバシイ」を出すと「でかでかどんぐり」「ミサイルどんぐり」「ペットボトル」。「ミズナラ」を出すと「おかあさんどんぐり」「アルマジロ」。まるで市場の競りのような活気で、どんぐりの命名ごっこが始まった。

「どんぐりにもいろんな形があるんだね」という千春さんの言葉に、その場はおさまって、いよいよ今日のメインイベント「どんぐり染め」にうつる。

園庭に、簡単なかまどを作って火を起こし、大鍋にお湯もわかして、準備OK。子どもたちは、両手にいっぱいどんぐりを持ってきて、「どうするの?」。「お鍋の中に入れてごらん」と言うと、一様にずるっと後退りして、どんぐりを威勢よく、鍋に向かって投げ入れ始めた。体は斜め、さらに目を半分閉じている状態で投げているから、ほとんどのどんぐりは、土の上にくるころころ。豆まきじゃないんだからと思うものの、子どもたちにしてみれば、かなりの大鍋。底からは、火がへびの舌のよう

に出している。

「こわい」と言うのもわかるような気がする。とにかく、ころがったどんぐりも拾い集めて、鍋に入れ、ぐ

つぐつぐつ。染め汁ができるまで、子どもたちは、園庭で自由に遊んでいる。火の番をしている私の

は、かなりの大鍋。底からは、火がへびの舌のよう



くぬぎ
ぞうせんどんぐり
ハリちゃん
ハリカくん



ミナチ
おかあさんどんぐり
アルマジロ



コナラ
のっほせん
ほそなかくん



スダシ
にわかさん
トウモロコシくん



アカガシ
ちびっこ
コマせん
シマウマどんぐり



マテバシイ
でかでかどんぐり
ペットボトル
ミサイルどんぐり

場所からは、園庭全体をよく見渡すことができる。

砂場で遊ぶ子、泥団子を作る子、私の横で火に、枝や葉を入れている子。ティピ（竹三本を柱にし、その回りに子どもたちが絵の具で模様を描いた大きな布をぐるりと巻いた家。インディアンの住居を真似て、九月のあそびはらっぱで作りました）でおままごとをしている子。いつものように、それぞれの落ち着き場所で遊んでいる。その中で一人、もくもくと熊手で枯れ葉を集めているT子がいる。集めた枯れ葉はすでに小さな山になっている。くすんだ赤、黄色、茶色の葉が、はらはらと落ちる下で、女の子が一人ミニ熊手で腰をかかめ、ひたすら枯れ葉を集めている姿は、まるで絵本の一ページのよう。

一方、鍋の中のどんぐりはぐつぐつ煮えて、汁もココア色になり、だいぶどろっとしてきた。木の枝で、かきまわしてみると、水面に白い小さな固まりが浮いてきた。一緒に、火の番をしていた女の子は

それこそ苦虫をつぶしたような顔をして、「うわあ、虫だ」。後で千春さんから「ぞう虫の子ども」だと教えてもらう。どんぐりの中で平和に過ごしていたのだから、小さい虫は、無残にも釜ゆでにされ、ぶかぶかぶか。

今回染めた布は、ガーゼ。水洗いしたガーゼを、どんぐり色の大鍋に子どもたちが入れていく。それを、順番に枝の先でゆっくりゆっくりかきまぜる。しばらく煮て火からおろし、そのままガーゼをつけた状態で冷めるまで置いておくことにした。

時々、染まり具合をチェックするかのようになり、大鍋から枝の先でガーゼを引っ張りあげに子どもたちが寄ってくる。

さて、先ほどのT子の枯れ葉集め。いつのまにか五、六人の仲間が加わって、だいぶ大きな山になっている。それを、急に一人が崩し始めた。すると、T子も他のみんなも加わって、あっというまに山は

まっ平ら。「あらあら」と思っていて見ていると、枯れ葉の上に大きな布を敷いて、その上に全員、ごろんと横になった。そして、もう一枚、大きな布を掛け布団にしたら、あっというまに立派な枯れ葉布団の出来上がり。女の子たちは、空を見上げながら、小さくキョッキョキョいいあっている。足が、モゾモゾ動いている。気持ちよさそう！

きっかけは、なんだったのか今も不明だが、枯れ葉布団の女の子たちが七ひきのこやぎの劇をやりたいたいと言いだした。千春さんがおかあさん。なぜか私がおおかみという役まで指定され、突然七匹のこやぎの野外劇が始まった。ジャングルジムの客席には、すずなりのお客様。子やぎの家はもちろん枯れ葉布団。

枯れ葉集めが劇遊びに展開していくというように子どもたちの遊びの流れには、脈絡があるようなないような、不思議な意外性があって面白いといつも

思う。

ガーゼは、無事ミルクチョコレート色に染まってはじめての染めは大成功。野外劇も、おおかみが井戸の底に落とされてかわいそうな最後を迎え、幕。

ぶにゅぶにゅスライム

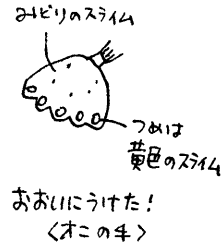
お天気のいい十一月の午後、屋上はらっばで「スライム」を作った。

バケツに、材料を入れて、手でくちゅくちゅよく混ぜる。すると、スライムになる瞬間を手の平で感じた子どもたちから「わあっ」という歓声があがった。ひんやりと冷たく、なんと表現したらよいのか、あのぶにゅぶにゅ感。

始めから終わりまで、ずーっと、バケツの中に手を入れて、スライムをクツクツチュクツチュしていたY子。スライムの端をもって、びよーんと伸ばして「あしーっ」と叫んでいる子。存在が消えてしまっ

たかのように、スライムで飛行機づくりに熱中しているK男。見学にきていた女性が、K男の飛行機を見て「すごいね、すごいね」と誉めると、彼は一言「そんなにすごいねっ
て言わなくてもいいんだよ。」

今回、食紅を赤、黄、緑と三色用意した。三色のスライムと透明のスライムを適当に混ぜてきれいな色合いのスライムを作っている子もいる。Y男は、緑のスライムで片手を丸ごとくるみ、ツメだけ、先生から分けてもらった黄色のスライムできちっとつけてある。けっこう不気味な仕上がりになっている。彼曰く「オニの手」。でも、すぐポロリとはが



れてしまうので、だんだん機嫌が悪くなり、癩癩を起こし始め、「ヒイヒイ」言いはじめ……とうとう顔まで立派なおニになってしまった。
ストローの先にスライムを丸くつけて、息を吹くと丸く膨らむ。それぞれトライしてみるが、けっこう強く息を吹かないとむずかしいので、なかなかできな。Y男は、自分のオニの手にストローの先をつっこんでしきりにふうふう吹いている。
その様子がなんか異様で、とても愉快。子どもって、なんて面白いんだろう！
変幻自在にその姿を変えるスライムと、変幻自在に遊ぶ子どもたち。この相性は抜群だと思う。「あそびはらっぱ定番・スライム」ぜひ試してみてください。さい。

◆材料（一人分）

ほう砂さ（薬局でサインして購入） 小きじ1/2

水

100CC

食紅

ひとつまみ

せんたくのり

1/2本

◆作り方

① 適当な器にほう砂の固まりがないように、サラサラ状にする。

② 食紅を入れて混ぜる。

③ 水でよく溶く。

④ せんたくのりを入れて、手でくちやくちやする。

◆注意

・ せんたくのりが服などにつかないように。

・ 口には絶対にいれない。

・ ブヨブヨ状態でビニール袋に入れて二〜三週間ほもつ。

・ 放っておくと自然に固まる。柔らかいうちに平たくして固めれば、モビールの材料にもなる。

白玉どんぐり団子

またまたどんぐり。

シイの実を干

春さんと手分けし

て集めてくる。本

当は子どもたちと

拾いにいききたいと

ころだが、残念な

がらこの近くにシ

イの木がない。二

人で拾ってきたマ

テバシイを約一五

〇個使う。

実を洗う。ペン

チで割る。皮とう

す皮をとる。すり

こぎで実をつぶ



す。そしてもちろん食べる——この作業は子どもたち。私たちは実をポイルし、蒸したりという作業を引き受けた。

スムーズにどんぐり団子作りは進んで、実をつぶす段になった。すりこぎとボールをセットにして渡したのが大間違い。カンカンカンカンカンカンと一斉にすりこぎでボールをたたき始めたのだ。その音にくらくらしながらも、シイの実を各ボールに入れていく。すると、カンカンでテンションをすっかかり上げた子どもたち、つぶすのに力が入って、トンとんという感じ。上手につぶし始めた。やれやれ。次はそのすりつぶした実には、白玉粉1/2カップに水を混ぜて耳たぶ状にしたものを混ぜる……ハズだった。全体量をみたら、だいぶ少ないことに気がついた私たち。シイの実はない。あるのは白玉粉。それなら、ある方をいれるしかない。というわけ、白玉粉をあるだけいれて量をふやし、団子にす

ることに決定。最後は蒸して三十分。きなこ砂糖をまぶして出来上がり。白玉団子の中にシイの実がほどよく混ざって子どもたちの感想も「おいしかった！」

いい場所

気持ちのいい場所を見つけた。そこは、井の頭線の駒場東大前の駅から見える場所で、夏は木と草がうっそうとして中に入ることはいできない。でも、ほどよい傾斜があって、草木が枯れたら絶対に草スキーができると確信。「秋になったら子どもたちと行こう」と千春さんと決めていた。

その日がきた。

子どもたちは、うっそうとした茂みを通りぬける時「やだーっ」を連発していたが、目的地について、ばあーっと視界が広がったとたん、イキイキ。そこは、思った以上に魅力的な場所だった。木々

のにおいでいっばい。なだらかな傾斜は一面枯れ葉のじゅうたん。枯れ木がぬうっと横たわり、ツタが枝からぶらさがっていて、木の枝が地面に向かってアーチ状に垂れている。

ごみ袋をお尻に敷いて、夢にまで見た草スキーを始める。しかし、残念ながら、すべらない……。子どもたちもすべらないのだから、体重のせいではない。やはり、段ボールじゃないとだめだったかなと反省。

でもがっかりしているのは私たちだけで、子どもたちはそれぞれに遊んでいる。ゴミ袋の中に入ってじっとただすわっている子。斜面を、ゴミ袋のマントをつけて走り下りている子。何度も何度も。地面から顔をだしている根を必死になって引っ張っている子。長いつたを枝にかけて、ブランコにして、ゆうらゆうらしている子。圧巻だったのは、地面から一メートル位の高さの所、ひゆるんと横にのびた枝の

上を一人で渡って下りた子。おそろおそろへっぴり腰になりながら、しっかりと枝をつかんでそろそろと渡りきったT君。「やったよ、やった」と大喜び。こんなにもいい場所が、たくさんあったらいいのにと心から思う。

*

からすうりの朱の色とぶっくらした膨らみは本当にきれいだ。もうしばらく見ていたかったのに、女の子が「お人形を作る」と言っばっさりカットしてしまった。すると、中から種が出てきた。女の子は開口一番「あつ、黄色い納豆」。夕焼け色に黄色のコントラストが、またきれいだ。

秋の日は短く、ますます短くなって、あそびはらっぱも秋から冬へ……。

(幼年童話作家)